

非正規雇用と入職経路

—正規雇用への転職のパネルデータ分析—

東京大学 福井康貴

1 目的

本報告の目的は、非正規雇用から正規雇用への転職における、入職経路の役割を分析することである。とくに、社会的ネットワーク¹とハローワークの利用が、非正規雇用の中でも不利な属性・条件を持つ者の正規転換に役立つのかに焦点をあてる。非正規雇用からの移動というテーマに、転職プロセスの視点を導入することで、外部労働市場を通じた正規転換に関して、より解像度の高い像を提示したい。

先行研究では、求職者と友人の同類性（social homophily）が社会的ネットワークと相関している可能性や、利用者のセルフセレクトのため、能力や求職意欲等の欠落変数とハローワーク利用との相関が生じる問題があることが指摘されている。そこで相関が疑われる観察されない要因を除去した分析によって、入職経路の個人内効果を取り出す。そのうえで、変更できない個人属性や条件（初職入職時の労働市場環境、初職非正規雇用、学歴、性別）に応じた入職経路のパフォーマンスの違いに焦点をあてた分析を行う。

2 方法

2013年に労働政策研究・研修機構が実施した「職業キャリアと働き方に関するアンケート」のデータを利用した。調査対象は全国の25～34歳（若年）の男女3000人、35～44歳（壮年）の男女7000人である（有効回収率49.7%）。

過去と現在の職歴情報から、勤務先を1つのピリオドとする、パーソンピリオドデータを作成した。転職経験者で前職の退職時の雇用形態が非正規雇用のケースが分析対象であり、正規雇用への転職が従属変数である。固定効果モデルとハイブリッドモデルを使って分析した。

3 結果

固定効果ロジットモデルとの比較によれば、Pooledロジットモデルでは、社会的ネットワークとハローワーク利用の回帰係数が過小推定されていた。つぎに、上記の個人属性・条件と入職経路とのクロスレベル交互作用を、ハイブリッドロジットモデルによって検討した結果、初職が非正規雇用である場合と、専門・短大・高専レベルの学歴に関しては、ハローワークを通じた正規転換確率が上がるということが分かった。

4 結論

非正規雇用からの転職で用いられる入職経路は直接応募が最も一般的であるが、正規転換は社会的ネットワークやハローワークの利用から生じやすい。分析結果からは、これらの入職経路の効果は、同類性や求職意欲等に還元できない固有の効果であることが示唆される。

社会的ネットワークの効果は、今回検討した求職者の属性や条件によって左右されていなかった。ハローワークには、転職時の失業率の影響を受けやすいなど、その性能が市場環境に依存する脆弱性があるものの、職業キャリアを非正規雇用から開始する不利を挽回する経路になっている可能性が明らかになった。

¹ 本報告での社会的ネットワークは友人・知人の紹介を指す。